

高標高茶園の品種選定と栽培技術

姫野秀三・広瀬真一・朝倉政江・稲垣智之¹⁾ (大分県農業技術センター・¹⁾ 大分県庁農産課)

Hidezo HIMENO, Shin-ichi HIROSE, Masae ASAKURA and Tomoyuki INAGAKI : Varieties and Cultural Practices Adaptable to Tea-Cultivation in the Highlands in Oita

近年、大分県では標高500~800mの高標高地で茶園の造成が行われているが、これまでにこのような高標高地での栽培例は少なく、品種や栽培法の検討が十分なされていない。そこで、標高820mの南海部郡宇目町天神原に試験圃場を設置して検討した。

1. 材料及び方法

1) 品種選定

供試品種として、'やぶきた' 'みねかおり' 'おくゆたか' 'おくみどり' を用い、1991年4月に現地に定植した。栽植様式は、畝間180cm, 株間35cmの二条植(3,200本/10a)とした。

2) 栽培技術 (寒干風害防止対策)

(1) 被覆資材の利用

供試品種として 'おくみどり' を用い、化学繊維被覆資材のタフベル4,000Bを使用し、トンネル被覆とした。

(2) 栽植様式

供試品種として 'おくみどり' を用い、栽植様式は一条植区 (180cm×30cm, 1,850本/10a) と二条植区 (180cm×35cm, 3,200本/10a) の2処理とした。

(3) 定植苗の苗齢

供試品種として 'やぶきた' を用い、苗齢は2年生及び4年生を用いた。栽植様式は一条植 (180cm×30cm, 1,850本/10a) とした。

2. 結果及び考察

1) 品種選定

供試4品種の定植4年目の1994年の生育状況は、'やぶきた' が樹高、株張り、収量ともに優れ、'おくゆたか' もほぼ同程度であった。晩生種として期待した 'おくみどり' は、枝条の節間が長く徒長気味であったため、冬季の寒干風害を強く受け、生育がやや劣った。'みねかおり' は、樹勢が弱く、他の3品種より生育が遅れた (第1表)。

製茶品質は、いずれの品種も摘採遅れであったにもかかわらず、こわ葉臭がほとんど感じられず、品種特有のくせのあるにおいもなく、渋味の少ないやわらかい味であった。適期摘採を行えば、低標高地よりかなり良好な品質が得られると推察された。

2) 栽培技術

化学繊維被覆資材を用いたトンネル被覆を検討した結果、被覆1年目、2年目ともに被覆による明らかな効果がみられた (第2表)。しかし、3年目には樹高の増加

に伴いトンネルの高さが高くなり、強風によって被覆資材が破損し、急激な温度低下から摘採面の枯れ込みが多く発生し逆効果となった。このことから、被覆期間は定植後2年までが良いと判断した。

栽植様式は、二条植の方が生育が良く、早期成園化に適する結果が得られた。

定植苗の苗齢と生育の関係では、活着率 (生存率) ではやや劣ったものの、大苗 (4年生苗) の方が優れた。

以上の結果から、高標高地への導入品種としては、'やぶきた' 'おくゆたか' が適している。寒干風害を防止し、早期成園化を図るため、定植苗はできるだけ大苗を用いる。2年生苗を用いる場合は栽植様式を二条植 (3,200本/10a) とし、定植後2年間は冬季 (12月~3月) のトンネル被覆が必要である。

第1表 生育調査 (1994年)

品 種 名	樹高 (cm)	株張り (cm)	株張り ^{a)} 指数	5段階 ^{b)} 生育判定	摘採期 (月日)	10a当たり ^{c)} 収量(kg)
やぶきた	66	98	1.48	4	5/25	139
みねかおり	50	64	1.28	2	—	—
おくゆたか	59	94	1.59	4	5/27	106
おくみどり	59	85	1.44	3	5/28	86

注) a) 株張り指数=株張り/樹高で算出

b) 生育の良否は5→1 (良→不良)

c) 収量調査は5月30日、樹高等の調査は7月14日に調査した

第2表 被覆資材の利用効果

年 処 理	活着率(生存率) (%)	樹高 (cm)	株張り (cm)	株張り 指数	5段階 生育判定
1992 化学繊維被覆	97	40	28	0.69	4
無 処 理	87	37	20	0.55	3
1993 化学繊維被覆	97	58	68	1.17	4
無 処 理	82	50	57	1.13	3
1994 化学繊維被覆	85	50	70	1.40	2
無 処 理	82	59	85	1.44	3